

週日の説教

金 大烈 神父 2011年10月29日(土)

《へりくだる者は高められる ～自ら低くなれば幸せになれる～》

今日の福音(ルカ 14・1、7-11)を読むと、イエス様が素晴らしい心理学者のように人の心の動きを読んでいらっしゃるのが分かります。

この福音を読んで、「私は、人より高い立場になりたいとは思わない。」という人がいるでしょうか。「はい」という人がいたら、それは嘘でしょう。人間は、子どもの時から自然に上下関係を学びます。「この人には従わなくてはいけない」とか、「弟や妹は自分が先導しなくてはいけない」ということを自然に身につけています。そして、子どもの時も、大人になっても、年をとってからでも、一番嫌なのは自分が低く扱われることです。「私は低く見られても気にしない。」と言う人がいれば、それも嘘でしょう。これは、性格が悪いからそう思うのではなくて、人間の自然な反応です。自分の立場にふさわしい反応が相手から返って来なければ、気分を悪くします。これは当然のことです。

たとえば、子どもが親を認めず、いつも見降ろし、注意をすれば無視してしまう。これでは子どもとは言えないでしょう。この子を産んだために、なぜこのように苦しまなければならないのか、そういう思いにまでなるでしょう。

イエス様は、この福音で、「高められたければ、低くなりなさい」と言っているのではありません。「高くなることに何の意味があるのか」と訴えているのです。イエス様は、高くなりたい気持ち自体が、高慢に陥らせることを、よく分かっていました。

弟子たちの中でもいろいろな争いがありました。イエス様の約束した国が実現されたら、誰が右の席に座るのか、誰が左の席に座るのか、という論争がありました。しかし、本当に弟子となるのならば、このような考えさえ無くさなくてははいけない、とおっしゃっているのです。

人間は、認められたい、低く見られたくない、できれば人の上に立って人々から尊敬されたいと思うものです。これは、みんな同じです。しかし、低くされるのではなく、自分から低くする時に人は幸せになれるのです。能力がないからではなく、能力があって余裕があるから、人の心を押し量り、自ら低くなれるのです。言いかえれば、これは勝者の余裕です。しかし、上に上がろうとする者は、いつも傷だらけです。いつ人から責められるか分からないけれど、人に負けたくない、劣等感だらけだ、と叫んでいるようです。そうならないために、いつも余裕を持ちましょう。

そして、自分が低くなることよりもっと大事なことは、相手を高めることです。相手を高めれば、望まなくても皆様も高くなります。それは、ふさわしい高さだと思います。高いと言われる人々を見てください。人間はみんな同じ高さを持っています。しかし何かの理由で、「あの人は偉い」、「あの人は見降ろしてもよい」と思ってしまうのです。そのような小さな感情が集まって、この世の中の全ての差別が生じるのです。それを意識しましょう。

ありがとうございました。